

文
書
佳
話

鳩巢先生著

不許翻刻

駿臺雜話

東都

崇文堂梓



新刊駿臺雜話序

新刊駿臺雜話序

駿臺雜話五卷。迺鳩巢室先生之所著也。夫以講論
之餘。暨及此言。大抵發乎所問者。而研窮理義。藻
鑑人物。或往事之可感。或當世之可警。莫非守正學
而扶名教之意也。何其諄諄。諷人之若是我。一時遊
門之士。皆震注而實歸。定可知已。明遠雖不敏。執經
下座。竊與有聞焉。嗟乎。在則人亡。則書先生已遠。九
原不作。後之讀此書者。亦可以想見其造詣之深。爾。
雖然。鐘之應撞。而始鳴。其聲之大小。洪纖。惟隨乎其



しつゝ 衆國大塚北東駿馬...
すひて 伯父の 福井翁...
すもく 家君...
さひ 豊村...
多 豊村...
あはれ...
さく...
了 衰病...
とん...
会 松...
親...
善...
類...

かゝつて。花下^{もと}に寝^ねむもあそびにけしきなり
思^{おも}ふ。わさつてまよふやひさく。きあらし
のよく。まきけり。

吉原^{キヨハラ}の。九月中旬。旭^{アサヒ}東^{トウ}に。新^{ニホ}駿^{セン}臺^{ダイ}の。字^ジ
ろ。毫^{スズ}少^シく。筆^{フデ}を。さし。

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

駿臺雜話目録 二

仁集

巻之二

駿臺雜話目錄

仁集

老學の自叙イぢよ

異説カシのまらしく

愚公ぐこうの山

葉公せいのの龍たけのこ

矯狂たけのこ發言いふこと情こころ

鬼神おにの徳とく

妖まじ々まじ人ひとのまじ奥おく子こ

年とし肉にくのまじ春はる

釋源しやくげん宣くわんの折ちやく言げん

心こころのまじ月つき志こころのまじ心こころ

老僧らうそうの接せつ本ぽん

扁鵲へんかく茶ちや匙しとまじまじまじ

忠孝ちゆうかうの心こころ

聖人せいじんのまじ識し

飛驒ひだ山やまの天てん狗く

袖そでひまじちまじのまじ歌うた

諸道... 義集... 秘訣

諸道しよたうより入

義集

夫ふ運んの秘ひ昔せき古こ

天人てんじん相あひ勝かち

鈴木すずき某なにかの歌うた

不ふ收しゆ不ふ求きう

秘ひ事じハハ捷せつ

仁にん心しんののいいろろちち

浩こう然ぜんのの氣き

民たみもも王わう者しやのの天てん

秘ひ寂じやく室しつのの秘ひ訣けつ

善ぜん惡あくのの報ほう

愛あい乃の浮う世せ

朝あさのの花はな一いつ時とき

春はる秋あきののおお舞まひののひ

佛ぶつのの心しんののまままま

義ぎとと心しんののまままま

敬けいのの子し夫ふ

富とみ士しののすすままをを學まなぶぶ

天てん下かのの寶たう

豊とよ集しゆ

風ふう俗そくハハ政せいのの田でん地ち

浩然の氣

民も王者の天

敬の子夫

富士のすそを登

天下の寶

禮集

天下ハ天下此天下

枚田壹波

阿閉掃如

歲寒知松栢

烈女種や

天野二郎兵衛

二人の兒

智集

風俗ハ政の田地

直諫ハ一番鎗トモ

直諫ハ一番鎗トモと雖

伴大膳

士の風義

手拍子手よゆ春風

澤橋の母

結露の何

智集

四

燈臺もやくと柱

法ハ江河のあそ

はとく草

渡邉番

春時の意欲

足利家の乱

兵法の大事

兵と、詭道

大敵およぼす

信集

運慶の伝

鴟鵂のゆき

青砥の續松

大佛の銭

楠正成

武田信繁

孫臏韓信の兵法

不志向君

月々世々の政見

離騷の秘事

犬敵ふよわう

信集

月々世々の政見

遍照の星

詩文の評品

六義の沙汰

多残善賈

曇陽大作

言ハ身の文

尤物人々移

離騷の秘事

世ととてく牙すくは

倭船の感興の益あり

作文の讀書のわたり

文章の盛衰

寸鉄人々少強は

一日の澤

年よえは

駿基問答の語は限りなくわたり。経傳の文と論を述べ。所論の書よよ。諸生の問よ答も。所向る人よきく。

信集

たとのるに語しきに叙添とく。家ノ辨一居あるはし
四語大や。古雅と云く。此世俗のや。も俗と避るべしと。

素情よましく。人聴ふ切や。多るは。鄙しき俗語や。も。
そのまゝに用く。擇ひては。は。つや。は。わ。雅。及。近。代。漢。字。
とも。ら。ひ。く。音。を。き。ら。ひ。よ。く。常。語。や。す。は。わ。ま。家。
の。盛。衰。よ。武。運。や。い。ひ。武。士。の。戦。切。よ。武。逸。と。い。ひ。人。の。礼。節。
す。は。わ。投。げ。や。い。ひ。事。の。懈。弛。す。は。わ。ゆ。め。と。い。ひ。若。父。の。
義。後。と。勘。高。と。い。ひ。山。林。の。鬼。魅。と。天。狗。と。い。ひ。是。等。其。類。
や。ま。多。く。甚。き。類。と。い。ひ。も。久。き。世。の。い。ひ。事。の。詞。や。も。
今。改。る。よ。及。ハ。を。又。字。に。誤。ア。と。ら。ゆ。は。わ。も。號。令。や。流。
布。す。と。ゆ。り。と。い。ひ。尙。字。たり。ま。も。觸。字。と。も。ら。ひ。強。む。と。
去。く。敷。く。ま。ん。と。も。と。や。つ。つ。と。也。字。あ。ら。ま。も。押。字。と。も。ら。

漢字の考

六

1. 漢書卷之第一
 2. 漢書卷之第二
 3. 漢書卷之第三
 4. 漢書卷之第四
 5. 漢書卷之第五
 6. 漢書卷之第六
 7. 漢書卷之第七
 8. 漢書卷之第八
 9. 漢書卷之第九
 10. 漢書卷之第十
 11. 漢書卷之第十一
 12. 漢書卷之第十二
 13. 漢書卷之第十三
 14. 漢書卷之第十四
 15. 漢書卷之第十五
 16. 漢書卷之第十六
 17. 漢書卷之第十七
 18. 漢書卷之第十八
 19. 漢書卷之第十九
 20. 漢書卷之第二十
 21. 漢書卷之第二十一
 22. 漢書卷之第二十二
 23. 漢書卷之第二十三
 24. 漢書卷之第二十四
 25. 漢書卷之第二十五
 26. 漢書卷之第二十六
 27. 漢書卷之第二十七
 28. 漢書卷之第二十八
 29. 漢書卷之第二十九
 30. 漢書卷之第三十
 31. 漢書卷之第三十一
 32. 漢書卷之第三十二
 33. 漢書卷之第三十三
 34. 漢書卷之第三十四
 35. 漢書卷之第三十五
 36. 漢書卷之第三十六
 37. 漢書卷之第三十七
 38. 漢書卷之第三十八
 39. 漢書卷之第三十九
 40. 漢書卷之第四十
 41. 漢書卷之第四十一
 42. 漢書卷之第四十二
 43. 漢書卷之第四十三
 44. 漢書卷之第四十四
 45. 漢書卷之第四十五
 46. 漢書卷之第四十六
 47. 漢書卷之第四十七
 48. 漢書卷之第四十八
 49. 漢書卷之第四十九
 50. 漢書卷之第五十
 51. 漢書卷之第五十一
 52. 漢書卷之第五十二
 53. 漢書卷之第五十三
 54. 漢書卷之第五十四
 55. 漢書卷之第五十五
 56. 漢書卷之第五十六
 57. 漢書卷之第五十七
 58. 漢書卷之第五十八
 59. 漢書卷之第五十九
 60. 漢書卷之第六十
 61. 漢書卷之第六十一
 62. 漢書卷之第六十二
 63. 漢書卷之第六十三
 64. 漢書卷之第六十四
 65. 漢書卷之第六十五
 66. 漢書卷之第六十六
 67. 漢書卷之第六十七
 68. 漢書卷之第六十八
 69. 漢書卷之第六十九
 70. 漢書卷之第七十
 71. 漢書卷之第七十一
 72. 漢書卷之第七十二
 73. 漢書卷之第七十三
 74. 漢書卷之第七十四
 75. 漢書卷之第七十五
 76. 漢書卷之第七十六
 77. 漢書卷之第七十七
 78. 漢書卷之第七十八
 79. 漢書卷之第七十九
 80. 漢書卷之第八十
 81. 漢書卷之第八十一
 82. 漢書卷之第八十二
 83. 漢書卷之第八十三
 84. 漢書卷之第八十四
 85. 漢書卷之第八十五
 86. 漢書卷之第八十六
 87. 漢書卷之第八十七
 88. 漢書卷之第八十八
 89. 漢書卷之第八十九
 90. 漢書卷之第九十
 91. 漢書卷之第九十一
 92. 漢書卷之第九十二
 93. 漢書卷之第九十三
 94. 漢書卷之第九十四
 95. 漢書卷之第九十五
 96. 漢書卷之第九十六
 97. 漢書卷之第九十七
 98. 漢書卷之第九十八
 99. 漢書卷之第九十九
 100. 漢書卷之第一百

駁其雜話卷一目錄

駿基雜話卷一目錄

仁集

老學此自叙

異説まらしく

愚公の山

葉公の龍

矯たつら狂きやう警しやう惰たせ

鬼神の徳

妖人よまとおと真まる

年内の立た春はる

秋源あきげん室むろのむら祈いのち言ご

心こころ乃の目めとと耳みみ

老僧らうそうのの接つぎ木き

扁鵲へんたく藥やく匙しととすす法ぽう

忠厚しゆこうのの心こころ

聖人せいじんのの識し

飛驒ひだ山の天てん狗く

袖そでひひちちくく乃の歌うた

諸道ついでに入

叙家室の秘訣

不才の誤り

森羅山の天候

武甲の勢

聖人の論

武甲の勢

出頁の心

武甲の勢

藤樹葉選とて

武甲の勢

英新の勢

武甲の勢

武甲の勢

武甲の勢

武甲の勢

武甲の勢

武甲の勢

武甲の勢

武甲の勢

武甲の勢

武甲の勢

武甲の勢

武甲の勢

駭甚雑話卷一

老学自叙

老学自叙の本文が縦書きで記述されている。

駭甚雜話卷一

老學自叙

是らく身の過すまは昔と思ふ。さやむと茂しげは産うむやえおさ
 しく。あゝのこ初はつく變かは結むすひて。詩書ししよ戎事じゆじとしてよまふの
 う。或あるは檄げきを持もつ藩邸はんてい小遊せうゆし。おらと及およと負おみて。京師けいしは
 務つと食く便べん。其後そののち水地みづぢは家いへ居ゐる。一ひと常じやうは奮ふん學がくと傾かため。家いへ預よ
つゝめと償つぎて。一生いしやうと終はつる事ことはなえと。予よも也やは終はつる。は償つぎ年ねん。えら
 たらふ。大家だいがの徵めいと辱はぢりして。ゆゑに故郷こきやうよゆらし。住すまへ。
おひさ才さい老材らうさい腐くて。やゝて丘かみ首くびをさる。死しと待まち経へは。えら。分ぶんりある。
 されど多くの歲月しゆげつを仰おほぐ。今いま大馬だいまは。えら。七十しちじゅう又またわら。定さだの年ねん。あて。

後集附録 卷之二

七

孟子集注 卷之十一 告子上 一

学は好むと道は志はとて人の師表とすを道徳とす
又あるは此材能をわきまむるに世はありて
此の事なりと他は信してあるに同なりと
自得しある事を信してさき後其れあると
そ多しなりとらわ甲斐をわらむとありて
病をうとあ
痛とあてたえは書は講とあてわらむと
て宋儒以来學術の異同はありて
程朱は字に疑と
賤はわらむと前はとある某とわらむと
俗儒は習
て純誦詞章と学み多くは年月と曠ふ
或は忽に
日の非と悟く治て古人已り爲す
の字に志あはせりとも不

幸ありて良師友とかりて
諸儒給此説は眩惑
て行朱の字言し
定見ありて
又

て純誦詞章と云ふは多く此年月と曠ふや。或時忽れ
日の北と悟く。治て古人已り。常きもの字に志あはしむ。不

幸ありて良師友とかりて。諸儒給此説。眩惑
て程朱と半信し。半疑ひはく。定見がう。行ふとくして又
む。く。歲月城郭をちる。年四十は。道なきあるを。わらへば
く。程朱は。業は。およ。易なる。く。まらる。致さる。て。それ。なり。月
程朱の書をよみて。心を清む。四書を覃む。その分。子。子。子
象。作。事。の。よ。く。高。く。ま。れ。い。よ。く。高。遠。は。道。を。卑。迫。く
おら。く。聖。人。後。も。必。其。言。は。後。に。能。及。は。れ。天。地。の。乃。也。
堯舜は。道。の。の。堯舜の。道。無。く。孔。孟。は。道。あり。孔。孟。は。た。い。
程朱の。道。や。ら。く。程朱は。道。を。捨。て。く。孔。孟。は。乃。は。あ。り。く。は。孔。
孟。は。道。を。と。く。堯舜の。道。は。あ。り。く。は。堯舜は。道。を。と。く。

後漢書
卷之六

て天地の道より遠くは老孝とわがる信するは多しぬ
中々信するも是る事、實にわが事と信するは實
見あしてはる事、中々は、翁の才忽天地の罰を蒙る
り、中、折ひひし事、度中も聽を改むる氣、此の時翁、
婦ら、是れ百年を壽定する事や、今又翁、ちひさく
海子、翁もわらひ朱子以後、宋から真西山、魏鶴山、元は許魯
齋、吳草廬、明中は薛敬軒、胡敬齋の諸賢とて、其の及
字に志ある人、程朱、呂、信するは、一代之碩学とて、宋、
溪、翁も、百家を綜核するは、揚外菴、翁も、文字、
説の事、翁も、程朱を議するは、文字、翁も、徳、翁も、同

翁も、事、翁も、明の中葉まで、翁も、
術とて、翁も、翁も、翁も、

溪せきの末すえにおく。百家ひゃくかを綜そう核かくする。揚やう外がい菴あんの山さんを以もつて文字ぶんじ傳でん
 伝でんの末すえにおく。程しやう朱しゆを議ぎする。學がく術じゆつの徳とくは、おく。向むか

然しかも、事こと成なりするに、明めいの中ちゆう葉えつを以もつて、お存ぞんせしむる事こと
 術じゆつを以もつて、名な教きやうを類るいするにや。王わう陽やう明めいは、良りやう智ち學がく
 と唱となせしむる。排たいきしむる。明めいの學がく風ふうを以もつて、愛あいする。陽やう明めい既しかに没ぼつ
 志しを其その流りゆう王わう龍りゆう溪せきの志しを以もつて、學がくとあふ。其その志しを以もつて、世よを
 學者がくしや良りやう智ち沈しん確かくし、窮きゆう理りを以もつて、伸しんす。其その弊へい王わう嘉か靖せい萬まん曆りつの風ふう
 を以もつて、天下てんかの學がくを以もつて、陽やう儒じゆ陰いん佛ふつの流りゆうとす。てや、以もつて、諸しよ賢けんを
 思おもふ。凡たゞ之のみ西せい山さんの志し賢けんを以もつて、汗あせを以もつて、下かを以もつて、所ところ好このむ。阿あ
 孫そん乎や也や。又また其その徳とく行ぎやう材さい裁さいする。明めい季きは、今いま此こゝ儒じゆの
 事ことを以もつて、不ふわらふ。其その事ことを以もつて、經きやう末まつ萬まん分ぶん此一いつ也や。及および、其その學がくを以もつて、
 志しを以もつて、好このむ。其その志しを以もつて、識しき議ぎする。其その志しを以もつて、鵬ぼんを以もつて、以もつて、

孫子兵法 卷之十一

て海を測るる似多し。韓愈の、てを升よせりて天と測る。天
よ小やるといふの類なり。ゆかりの形を識れ其就其新奇
かり成るはしむ。雷同尾鳴する。おまへて一國の國家百年
以來大平安しく文化日々開く。師儒世々輩ありし。其是れ非
たふ以て経術と尊く崇信しく。ゆるき模範を失ふは是と
そ。此のの者もや。よらるる此備儀くわして。皆く。家我
多。流傳をわけぬ。老嫗の儒とて。其ともふん。其就
獨狂の論と歸ありて。忌憚るる。世に。一々虚を吐き。群小
其をわすらるる。邪統横議。世に盛なる。あそ。抑も。信と。
誠と。世に是れ厄運と。いふ。よ。され。韓愈も。佛老虚をいふ。時

はまきく。獨り。排存して。そのり。て。蓋。河。比。せ。し。か。あ
區。前。の。書。を。と。る。に。天。地。鬼。神。臨。之。在。上。曾。莫。之。任。信。と。い

まゝおろすおろすは、邪説横議世に盛なるを、
類之世に此元運と云ふも、
韓愈も佛老盛すは、

生きたく猶ほ道、
孟簡は其の書をさるに、
折書一そり、
今翁らつひも、
孟子此四も及た、
韓愈

釋源空のちひ

ひし源空と九條の月搦殿は、
正谷は、
くろは、
ふくは、
空地獄は、
てらさ

ほどいけぬ。六わじ。うまるともなほも。極果といふ
 かのとき父墮（子地獄）なり。うまるともなほも。極果といふ
 ときわさる。前代（せんたい）は。殉死（しゆんじ）の制禁（せいきん）なり。うまるともなほも。極果といふ
 候（たう）此家殉死（しゆんじ）あり。わさる。中（ちゆう）に。興（きよう）論（ろん）のたむ人
 ちわとせん共家（きや）老（らう）のう共定（きやう）一行（いっけう）死（じ）とせし。不
 申（まを）許諾（きょだく）せむ。うまるともなほも。極果といふ
 ちわとせん共家（きや）老（らう）のう共定（きやう）一行（いっけう）死（じ）とせし。不
 申（まを）許諾（きょだく）せむ。うまるともなほも。極果といふ
 ちわとせん共家（きや）老（らう）のう共定（きやう）一行（いっけう）死（じ）とせし。不
 申（まを）許諾（きょだく）せむ。うまるともなほも。極果といふ

ちわとせん共家（きや）老（らう）のう共定（きやう）一行（いっけう）死（じ）とせし。不
 申（まを）許諾（きょだく）せむ。うまるともなほも。極果といふ

へや相約して奇く聚るに日ある如き名物をかきけり
て多々々々の老長も行くと度しなく。昨日ちみり入つち

てややましく諸客といふはし一に以て老長うらまて。其ま
あや欺き給ふもいづく折ひて片背す給ふまに情さあざ
うれつゝ其人もく。流るるを欺きゆるまはゆり一之昨日らみ
中ささといふとくうのうらうらうの如く。御教を教する為ま
折善也折善と背く律罰を得ゆとも。死ぬるやうに折れたる
ゆりくひされん死さすまら多る身すくゆえ。も折れあ折ひを
背くま情ゆく折まひゆりま。老長あまままにしてやゝぬけ
人ら公衆喪ふり。神罰やうま事まを之得く折善ひやう
ま。深室ままままらまらまら地獄まま事まを之得くゆえ
うら折善けらら。今翁の折善まままま。異あり。上無く白ま天

折善の巻

法苑珠林 卷之十一 三十三

よつてき下と后去成履く。天使よりびく折る折義は
教るら。天地の罰とらうとてはさまや我等の高き折るは源
かくも同く心ある。是はけりてはた教の教有と云ふ。
實我虚くすくわゆる。是と有とせはは有と云ふ。
虚と実とせはは實と虚と云ふ。さるは極至地獄のさる
とや虚の事や。是と云ふ。とすや真候一如とてこそはと。
性生れ教と多く衆生と導けは賢とすは思ふ。
流しはして念佛滅罪の中なるてや。是教迦如義
密者や。我れもかくも教ふは。經の傍にけ者
互に心とくく傳く。候中浄去地獄の沙汰とて記する

事とていふ。今浄空の折る相傳の者あり。九像殿は
浄土とて浄土とて。原空の隨土とて地獄とて。是れを

密者やろ。我れおしくも。能く此程やろ。程の傍にけ者と
互に心としくく。傳へく。候中。浄去地獄の沙汰をう記する

事とていふ。今淨空の折と相傳の者あり也。九條殿此
けり。浄去とてやろ。原空の隨て。地獄とやろ。さしは云と
て。有て。虚とて。實とて。元生く生死と。離るん
る。法とて。教迦の。なまよ。の。あ。そ。ま。は。つ。さ。ろ。う。傍にま
あ。と。や。ろ。と。吾儒と。識と。ゆ。く。人。と。教化する。道と。て。
雲泥の。さ。さ。り。と。て。

異説やろ。

わろ。自。翁。の。病。と。同。と。く。人。と。ま。ろ。と。と。翁。も。洗。然。よ。あ。せ
信。と。今。ろ。と。ま。ろ。の。か。い。と。う。の。侍。聖。は。け。り。ま。の。難。を。て。見。ぬ
と。し。諸。の。わ。び。程。と。高。代。矣。彼。事。と。及。乃。今。座。中。一。人。翁。

びらひく。多く今西京東都におわく。世々鳴く人と率る儒者
 の流を重んじし。或る我國此道とく。神道と稱へくともわ
 了。或る陽明の學とく。良知とるやうしてとくとお。或る古
 とく。新義と造つてくともわ。物々実同の流をりくわ
 しのまをえとく。何事を辨とせん。翁此れくわわく。いり思ひ違
 ち也。翁といく高代門戸を多く。実流を唱わらその。解せう
 今やさりく之流や。さう之。物は是等此流とちる人。さうそ
 不身わらや。くははくじとく。翁の古く。厚と。流ともく。い
 い。けま。さ。や。竹ら。い。そ。も。遠ら。天。く。つ。く。一原。す。あ
 ち。あ。その。一原のと。あ。る。が。さ。人。情。を。ぬ。ま。は。わ。の。國。此。道。と

てへの國。さういりく。ら。良。知。此。流。そ。く。窮。理。く。さ。あ。り。ら
 ず。郵。魯。れ。ま。と。く。廉。浩。く。たり。と。く。い。り。物。り。と。を。を。ら。ハ

いづれもさす中々侍らぬ。そも遠く天をいつくし一原のあ
ま。その一原のとあろ哉。人懐くぬまはわの國は道と

てへの國よりいつくし良知此後そく窮理ふとあつら
す。鄒魯此學とくまんりく。廉洛たりとあつら。終りてを知らハ
聖賢此書よあつら。聖賢の書ハありとやとつら。此下は志
と遜くくほくよあつら。てハ。あつら。得るは道。今此
儒者。あつら。ハ自高ありとあつら。濂洛の書とくつら。續
人あつら。あつら。程朱此藩籬と。窺て。己の心
先多ありとあつら。大賢を議以。不見の是也と。姑く
聖賢。是其學此。將為浮淺なりとあつら。て。そあつら。是也。
さあつら。の人々。孔孟の書とくほく。讀ありとあつら。ハ。孔孟の
とも得らる。孔孟の書。あつら。て。ハ。つら。程朱此後よ

和歌山府志

卷之二

七

ともわき神名と云く其後と云くは我國の其の擔たん湯武
教逆えんぎの類るいなりは其いとも神道と仁義のありありや

中庸の良知と云く其後と云くは佛性と明德と並稱し
我房辨度と智仁勇此三といふ其いとも良知を此の
よりわきわきん古學といふ其後と云くは大學と聖人の書
わきわき孔教の道二はありやといふ其いとも古學は
徳性外
もわきわき此後と云くは翁の教とのとぬるわきわき
仁義とわき内外と合意古今に通ずらるる古學は
大中と正の道とく孔孟の心統ありわきわきの論
わきわきわきわきわきわきわきわきわきわきわき
踐履とてわきわきわきわきわきわきわきわきわき
わきわきわきわきわきわきわきわきわきわきわき

後漢書卷之二

和也。加、よ。陽明、も。支離、とく。未、な。字、と。幾、と。も。非、の。記、の。
 意、た。中、く。了、也。信、道、も。ふ。か。く。實、行、と。志、ま。く。空、談、と。は。し。ひ。ん。
 聖、賢、の。戒、る。る。や。ま。た。今、文、翁、事、新、一、く。中、及、之、は。
 ぬ。く。慎、し、こ。も。あ。り。也。

心のめちひ

座、中、又、心、を。ら。し。つ。か。る。翁、の。信、ら。く。お。く。吾、黨、は。士、の。相、戒、り。て
 實、行、を。し、し。む。け。り。也。邪、説、と。距、く。上、第、と。中、第、は。こ。し。ま。六
 孟、子、と。揚、墨、と。距、く。好、辯、の。説、と。六、辯、は。論、を。し。り。も。其、要、に
 論、して。君、子、六、種、く。及、ら。の。も。さ。し。に。功、を。し。ま。し。也。况、や。今、偽、説、
 辯、の。徒、野、を。ま。あ。る。葛、の。と。く。と。ひ、説、の。も。邪、説、妖、妄、の。説、也。

ある本此葉のよとてけむるそれなとてひく
 辯説と費や
 さんと及く吾道と後とるこもするやく信らるや
 けしぬの事や
 けしぬの事や

論して君子六經に及ぶのそとに在りては、況や今偽學詭
辨の伎野をよみ、つる葛のそとに在りては、邪徒妖妄の詭辨

ある本は葉のそとに在りては、辨詆と書き
さんと及く吾道と流るるそとに在りては、辨詆と書き
い。わら儒者の位を、耳と辨詆と書き、そとに在りては、辨詆と書き
わら凡聖人の位を、辨詆と書き、そとに在りては、辨詆と書き
ら、及く文雅風流のそとに在りては、辨詆と書き、そとに在りては、辨詆と書き
そとに在りては、辨詆と書き、そとに在りては、辨詆と書き、そとに在りては、辨詆と書き
の性、わら凡聖人の位を、辨詆と書き、そとに在りては、辨詆と書き、そとに在りては、辨詆と書き
友、及く辨詆と書き、そとに在りては、辨詆と書き、そとに在りては、辨詆と書き、そとに在りては、辨詆と書き
そとに在りては、辨詆と書き、そとに在りては、辨詆と書き、そとに在りては、辨詆と書き、そとに在りては、辨詆と書き
い、わらひく、辨詆と書き、そとに在りては、辨詆と書き、そとに在りては、辨詆と書き、そとに在りては、辨詆と書き

友、及く辨詆と書き、そとに在りては、辨詆と書き、そとに在りては、辨詆と書き、そとに在りては、辨詆と書き

ふとひやをいふとけい人の目とてのやうくおぼえさるゝなる
るもわるくそとてうへ今取らぬまのぼろおぼえておれず

乃をいふとやうくゆるふとく喪心の人と相おいて是非と
論まらぬ似るもその論まらぬとて記と同一するもやうく。然
るも翁望てうけ記の起すを考ふる其人をや記論の儒
かす。記論の儒ハ諸子百家と浩穽とらふとてのよほして。四
子六經とてとむらるるやう。多し其文辭刻詰と金議一
て。理勢のゆき不及とて。自らわきまをきり義理より
きとて。飽きく已の博学と自負して虚譽を要す
行ふ世も亦是とて推崇く一代の儒とて。明季諸儒の
風大抵かくのやう。とて。放蕩不遜ありて。人々驕りて傲
ろと高致せし。好く大言を吐く。先賢と毀む。抗強く。高唐

宋諸儒のよきものと云ふ。物と云ふは有職ありて是と云ふは六学を以て
 荀莊、儀毒と云ふ文を以て王季の淳華と指すはこれ
 ハ己の臆見とすやうせく。道は天地の道なり。事物由縁起り
 われを以て是と云ふ曲學と合せり。道は文雅風流の道なり。己信信
 ことありて、史の如く又偏を人の性より起るは、帝より傳
 するやと云ふやうなり。世俗多くやと信じて、群は此道と云
 ふ事ありて、世の奇怪を好むことあり。今史記の中は、俗の
 人の心術を害し、世の名教を損するありやと云ふも、亦その
 久周礼の造言此刑わらふ。その為やく俗をせうし。是れ中より
 道徳しやく材力と云ふ指す身と云ふ。是を支むとす。是れ大慶の

一本と云ふは、多と云ふ言は、距き、辞して、辭くとも、多と云ふは、
 是れ己の量と云ふは、己の量と云ふは、己の量と云ふは、己の量と云ふは、

久周礼之造言此刑わらるるの處やくゆるせう。此中よ翁
の道徳しやく材力事し拙き身とて、是と支むとす。故に大慶の

一本とていふらるる。多と私言く距き辞して聞くと。多とて信
まらざ。己の量とてとらるるの識と。身とのまらざるるをハ
経来此後とて此禮服とせしむ。宋人の章甫と越く貢
らあや。断髮の信とらるる。経来此後天下の
名曲の多と。郢客此陽春と楚の唱と。仙と。馭古此俗
大和する入也。詩とて。知我子のハ我心憂あると。不知我
者我何事と。求むと。依りて。多と。蒼天の中と。今と。け詩の
本更周此事と。多と。け。他と。今翁と。吾道此事と。多と。け
と。事と。多と。け。今と。け。

愚公の山

了きも、翁ちきの、知己ちきと一世ちきの、しめあり、ゆら、若者ちきと、
 僻妻ひきさい教しんありて、根ねと、し、事ことの、うん、世よの、はき、わら、う、
 志しき、あ、あ、女に希き花はの、一い何なと、や、下したる、き、大おほく、う、し、
 了しや、世よと、歴れきく、心こころ通とほへ、う、ぬ、ら、あ、り、あ、心こころ通とほく、して、
 あ、其その驗けんと、ん、し、思おもや、未いま鍊れんの、お、く、り、あ、也、
 書しよと、又また、終しゆうつ、や、思おもひ、公こうや、あ、一い人ひとわ、り、あ、
 わ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、
 是こゝろより、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、
 一い人ひとを、き、ん、く、う、大おほなる、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、
 こゝろ、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、

代しろも、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、
 代しろも、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、あ、り、

一入をきんくう大なる山よあつたやう人のカサくさるゝとく
こめらほくさるや。其まらうと後れは事行。悪公まてわの

代まもあゆらそあて。わ。ま此代まも。後くあゆら。うの孫ら
代まも又其ま此代まも。後くあゆら。うの孫ら。うの孫ら。うの孫ら
やわらふまや。うの孫ら。うの孫ら。うの孫ら。うの孫ら。うの孫ら
高言くうげんやま。うの孫ら。うの孫ら。うの孫ら。うの孫ら。うの孫ら
世よ智やま。うの孫ら。うの孫ら。うの孫ら。うの孫ら。うの孫ら
事。悪公。うの孫ら。うの孫ら。うの孫ら。うの孫ら。うの孫ら
智やま。うの孫ら。うの孫ら。うの孫ら。うの孫ら。うの孫ら
まらうの事と聞くと。うの孫ら。うの孫ら。うの孫ら。うの孫ら。うの孫ら
物せねや。うの孫ら。うの孫ら。うの孫ら。うの孫ら。うの孫ら

後れは事行

二

二十

いふゆゑに智ハ及く事やまふと云ふ事御冠の世に親して云々
うへにけくらしぬ今翁と百年備定ありのみと云ふ事
信重凡世の明智する人もまふと云ふ翁は迂闊なるおとど衆也
と云ふ事や老ひのあるおれわんげ志と云ふ事身を修むると云ふ
思ひ信重と云ふ事山は松子此類する事

老僧の接木

丁度此をいふ事よく思ひ出さずとも思ひ出さずとも
のさまたけり乃院をく望む心は真言寺下翁と云ふ事
いふ事よく其住僧をたすことよく寺へ行つ本の実ひらひ
やまうて遊みし住僧と云ふ事よく思ひ出さずとも思ひ出さずとも

語をい成さず信重と云ふ事寛永の山に於て事ある事
將軍家管中と云ふ事御意持のわんげ時内と云ふ事おれ

こころを其位信をたすくをたぐき行つ。本の美ひらひ
やまて持ひの位信をたすくむらひて。前位の時此事とせん

信を成さし信をく。寛永のあら此事とせん。

將軍家谷中より御意持のおり。対内もあぐあはし
あはせり。に後よりく。分れけり。おのり。と渡渡わす
き。おのり。其時此位信をたすく。八旬。及く。なき。おて。け。と。と
信をけ。と。接木。と。居。る。ら。に。後。位。の。人。が。ま。ま。り。て。お
側。二。人。之。人。は。ま。ま。し。と。中。く。ぬ。ん。と。ま。ま。り。と。事。を。は。異。派
より。は。た。の。の。り。が。ま。ま。り。と。事。を。は。異。派。を。ま。ま。り。と。事。を。は。異。派
し。と。老。信。を。わ。や。し。と。思。ひ。と。ま。ま。り。と。事。を。は。異。派。を。ま。ま。り。と
お。の。り。と。ま。ま。り。と。事。を。は。異。派。を。ま。ま。り。と。事。を。は。異。派。を。ま。ま。り。と
と。と。事。を。は。異。派。を。ま。ま。り。と。事。を。は。異。派。を。ま。ま。り。と。事。を。は。異。派。を。ま。ま。り。と

しきしきとあつちあつちと毒わたりしは老僧の身は誰人
かまはらうかおのふ事と云ふあはれものかよくあはれく見
ゆる今いふ事もはたさくおとらふ後任の代りもよくいふ事
たさくわらふぬなり。ゆゑに梅と志げも寺も正とやんと我々
寺の爲と成りもよくすめりもやる。おちりもよく我一代も
る事なりや。いふことありて。老僧のしあを實
現かまはらふ感わらふかその行はれ代の人とあはれくあ
はれぬ代りゆめもよくはたし。老僧もまたいふ備へ大
きふかまはらう。奥へいふことありて。あはれくあはれく
とあはれ。いふ翁もいふ老僧。様本もよくあはれく。老朽ぬきと
ま

あはれぬ翁もいふ老僧と云ふはやく。人ともいふ人書あとのあはれ。後世
よやくいふ事なり。閑くらあはれもあはれ。いふ翁もいふ老僧。様本もよくあはれく。老朽ぬきと
ま

ふふかきまきく奥の書入一とあり一廿わたりとありと賜をら
とあるは、是れもい老僧の撰本とありとありと老朽ぬきとあり

あら限ら高学をさへはく入ると他人書やとのありて後世
よむく正學此因くら増おもわたり。けぬ此はち、萬の助と
もあらをけ、能死とも能くけぬとあり。古人のいへるは死々
と骨とらくやとあり一とあり。思ひわたりとあり。我がの
多め、轉らとあり。然るも能くぬとありと傳へたり。

葉公の龍

夫のしよとありてせは、能くぬとあり。能くぬとあり。能くぬとあり
あやとあり。能くぬとあり。能くぬとあり。能くぬとあり。能くぬとあり
能くぬとあり。能くぬとあり。能くぬとあり。能くぬとあり。能くぬとあり
能くぬとあり。能くぬとあり。能くぬとあり。能くぬとあり。能くぬとあり

葉公の龍

日よるまゝひまじしうやちぬまゝつゞくが事わが
 きやんややうきまゝうゝもてうゝる事わがわん今や
 事と皆備くわうわ（中）のくたのそい林愨洞愧けくわうん又わがまをく後
 世と侍るゝやむう（そい）葉云結とぬく其狀を畫うせく日衆
（わい）散せしふわる時真此法をとて聞えぬる事と結とく
 中うゝを破わるとわ、行あるぬるゝおとやうとてわが
 わひやんやむひ窓よと親きくゝゝまをた、重云大さく
 らうゝくむけはらひんわ、今東面友於の儒者とらうゝま
 中と正學れ志わるとわくゝんまやも、大くうゝと自ららそまふて
 際儒と稱し、我うや聖賢の道我好むや、は、論説

とけち、著述を懈ひ是とてく世々傲了く名我物とらる
 とや、とて返く實得の功わらうゝん、真此聖賢とわう目

中々正學に志する人とおるふ公事やも大くうと自らこそ其ふして
所儒と稱しに我れ聖賢の道我れ好むやと云はば論說

とけち著述を憚り是とて世に傲りたる我れ物たるは
とやよとて返く實得の功たるは片ごとく真其聖賢の道は目
とてして初見むとて是傳ふとて六日し海聖賢の道と好
むとて葉ふとて法と好むとて甲乙とて嬰の伴尼と毀
蕪軼の程順とてやむとて考へ是道とて齊此賢人とてハ
中其名長やとてとてとてとてとて況やとて及んたとの
とてされハ漢の楊雄通徳と稱し太玄と著し一代の儒とて
とてとて一旦賊莽とてとてとてとて第義とてとてとて
とて莽の世とて生るはとてとて半なりとてとて是等此學同とてと
孔孟のわかく節義のちとてとて責むとてとて必しとてとてとて

...

論語精義
卷之二

ふらふらと云ふは、
よらと察してよくく者之能あり。

扁鵲茶匙と云ふ

七日の命は翁の云ふ如く、
今日其論と果しん。今世儒者
朱子と議するは三等あり。第一等は陽明良知の說を祖して
朱子と議するは、陽明ハ傑出の人なり。朱子其學を毀て
支離とするは、第二等なり。而して朱子其學を
多し文字に傳くこと多く、内者の工夫やと云ふは、
格物の教と義をやすらひ、
格物の教と義をやすらひ、
格物の教と義をやすらひ、

はと云ふは、
の教良知と云ふは、

多し文字に傳くことやく。内省の工夫やとらやうふんて事
格物の教と義外やする程く。良知と標的として。一向内省よ

ほとやういふこと共忘りてさうよハわねと。然も朱子格物
の教良知と外よするくわらぬ事物と即ち良知と致とわす。
多し陽明の教此とく良知もややく事物と致と致といふ。
孟子の教詩書禮樂といふ也。詩書礼樂事物と此と何
ぞ。孔子の教文行忠信といふ也。文は六行わす。行は百行わす。忠
と不忠や。信と不信と。必事物よりさう共致と走るく。さう
ひとりの良知と致せぬ。おのけら致して。礼と事と及んば。おのけ
ららわして。樂と事と及んば。おのけら又聖人の良知と致せぬ。
おのけら百行と備へ忠信をすしや。さうも事と及んば。格物
やして。さうも事と及んば。聖人のけら。格物と致せぬ。

朱子格物論

十一

よむをいふ。おやうらへに孝れぬまはしむるのこゝろもあやむ。又
こゝろを孝れたるもあやむ。あやむ。このこゝろも孝れぬ。孝れぬ。

よやめてまゝのこゝろを講せよやいふもあらば又まゝの理
致のこゝろ究むれば孝親なるこゝろをいふたれらば
孝親の上あく其孝の南宮（南宮）とまはぬや。又と讀書（讀書）はやく
と聖人孝と論一節やわたり。及僕（及僕）て其理（其理）を述（述）其
事（事）をまゝにいふ。とあつての事（事）をまゝに例してあらはし。是
則格物（格物）のまゝにまゝに孝れぬ。とす。とあつての如く道理（道理）純熟
とす。後々わつて孝親のこゝろをいふ。とす。孝親のこゝろをいふ。其意を
いふ。とあつてのこゝろをいふ。とす。格物（格物）のまゝに物處（物處）をまゝに
かたよつて用へし。わする。其味をわする。とす。とあつての事（事）を
てまゝに良知（良知）のまゝにとす。はる。孝親のこゝろをいふ。とす。

孝親のこゝろをいふ。とす。

廿八

下。是と仰。して。その。し。其。量。を。け。せ。と。の。事。や。あ。不。は。
 て。と。ま。お。い。あ。れ。と。い。う。は。わ。れ。と。今。米。粟。に。弊。を。み。ん
 と。枯。物。窮。死。成。廢。す。ら。ハ。生。米。み。れ。を。と。ち。と。ら。の。と。よ。わ。ら。ん。矯。
 枉。過。直。や。い。ふ。一。と。ま。も。亦。ま。る。也。第。二。等。よ。ハ。理。氣。體
 用。の。の。後。孔。孟。此。言。及。と。ら。と。い。う。て。按。て。朱。子。と。様。す。ら
 わ。ら。び。一。孔。子。性。相。準。一。や。の。作。の。し。と。孟。子。よ。も。い。ふ。也。
 と。論。一。多。の。以。其。外。養。氣。の。精。や。や。唐。虞。二。代。の
 書。よ。河。洛。の。書。も。あ。る。よ。と。孔。子。と。仰。ら。る。と。ま。の。作。と。い。う。
 かの。宋。氏。法。先。生。其。指。の。聖。人。の。も。や。所。原。と。て。真。聖。賢。の。教。を
 あ。と。や。う。と。い。ふ。は。け。な。し。と。い。う。は。け。な。し。と。い。ふ。は。け。な。し。と。い。ふ。

と。い。ふ。子。と。稱。嘆。口。を。と。と。ら。況。や。程。朱。氏。時。孔。孟。の。世。と。い。ふ。
 と。遠。一。言。と。擯。の。論。と。い。ふ。一。道。と。い。ふ。と。急。や。う。道

かゝる家法法先生其指の聖人をもて所成して其後世の教
あといふるははるはるなりとて一はく是聖人のまゝに教を
傳ふるはるはるなりとて

とく。孫く稱嘆口をささる。況や程朱此の孔子の世とて
と遠く。言と撰ひ辯とあり。道とめくする。急なり。道
はる。あはる。多し。あはる。少し。何ぞ。必しも。想く。古の言と
踏籠たうまうとて。今。朱子。此。況。孔子。の。始。する。あはる。其。言。と。ぬ
く。若く。亮。なり。と。し。今。朱子。の。中。に。在。り。く。教。と。國。と
も。可。なり。と。知。る。と。已。ん。く。わ。る。あはる。孔子。の。始。する。あはる。
あはる。と。く。大。賢。の。況。と。辨。く。と。く。毀。る。と。其。學。識。の。淺。陋。な
る。と。あはる。其。議。論。と。と。く。い。ふ。と。疎。陋。層。淡。なり。と。く
よ。か。ん。有。り。と。あはる。と。く。奉。正。する。と。い。ふ。と。向。わ。れ。と。多。く。其。理。氣
の。況。を。わ。る。と。多。く。傳。は。れ。と。彼。の。い。ふ。と。天地。の。万。物。此。か。よ。り。と

のやんば我氣四向に流行し、万物を生じておのけくやん。
 是則天通するも昭然として見ざる無きあるわきも物と事
 一等とく形象やうし物と多て氣を配して理する。隱性ひんせいの
 ちうしと我其似ゆるに疑ハ彼に限るはわあせくも是儒の
 中よ是類一あり疑能わすしそうそは老子の云成
 婦の考へてや成教と免まゆとわたりわあせくは彼之思の
 是とくく臆決するもの事やわわ理氣前後の
 況ハ微妙なる事や。一在の作やう以造る。氣志はらく
 老子の治とるもく。多とくそとてえらり。ゆは車とてそ
 て車やう。事とてそとく案がう。多とく六車とて。是ハ端

かるも。是ハ軸かるも。是ハ軸ちゆうかるも。是ハ軸ちゆうかるも。是ハ軸ちゆうかるも。
 かるも。是ハ軸かるも。是ハ軸ちゆうかるも。是ハ軸ちゆうかるも。是ハ軸ちゆうかるも。
 かるも。是ハ軸かるも。是ハ軸ちゆうかるも。是ハ軸ちゆうかるも。是ハ軸ちゆうかるも。

とて心位大道といふ。こまきことく回つてや。體用といふは

もつてこの體用よわなるるわ。彼曲を此位僅のて得し有

足とす。六道は全體大用わるとも。此れゆへとて心とて。ゆへ論を

ふよ。多るは第三等子と。放蕩と貴ひ名檢といふ。此れ文辭

典籍とす。とて。一多の経朱子致窮理の況とて。八腐儒乃

常語とて。相も上嘲笑ふ。経ふ。学者脩己の通よ。おそ。靜とて

とも。せと。その議論とて。よ。不急の案を用の辨。統とて

人耳と噴とて。せと。は。あ。や。あ。と。は。挙て。い。ひ。お。ま。は。言の。果

よ。せん。多。ち。身。く。付。一。や。ま。か。う。一。ひ。う。扁鵲齊桓公の疾

と。是。く。て。い。ひ。ま。は。れ。い。ち。う。わ。は。は。い。ふ。と。多。ひ。よ。及。く。は。と。を。や。療。治

の。も。や。う。そ。う。一。程。く。茶。匙。と。す。く。致。を。や。ま。き。俗。を。其。弊。も。の

と。く。致。く。八。桓。公。の。疾。れ。り。ゆ。き。あ。く。一。儒。く。扁。鵲。お。ま。も。

よせん多^{にいそく}ち身^みを付^つくやとやうし。ひく^{みん}扁鵲^や齊桓公^のの疾^{いん}
と見^みく。てん^{てん}ひ^ひを^を致^しす。ち^ちの^のわ^わに^に。ふ^ふ多^たひ^ひ及^及く。と^とを^をや^や療^{りょう}治^じ

の^のち^ちや^やう^うし^し。行^いく。茶^{ちや}匙^しと^とす^すく^く。致^しす^す。俗^{じやく}を^を其^き弊^{へい}も^もの
く^く。至^しく^く。八^{はつ}桓^{げん}公^{こう}の^の疾^いれ^れ。ゆ^ゆき^き。あ^あく^く。儒^{にゆ}く^く。扁^{へん}鵲^{じやく}お^お。と^とも。
療^{りょう}治^じの^のち^ちや^やう^う。ゆ^ゆく^く。況^{けい}や^や老^{らう}学^{がく}非^ひ才^{さい}。智^ちの^の身^みを^を何^{なに}と^と道^{だう}
の^の病^{びやう}を^をや^やす^す。と^とあ^あん^ん。き^き。口^{くち}を^を指^さて^て。致^しす^す。を^をは^はら^らす^す。や^やを^をさ^さす^す。

矯^{きう}狂^{きやう}敬^{けい}言^{げん}指^し

翁^{おう}又^{また}い^い。ち^ち。當^{たう}代^{だい}東^{とう}西^{せい}兩^{りやう}於^おの^の儒^{にゆ}と^とん^んら^ら。よ^よゆ^ゆく^く。を^を入^いる^る。よ^よわ^わて^て。
柔^{じゆう}や^や論^{ろん}。一^{いつ}の^の論^{ろん}。多^たく^く。異^い論^{ろん}と^と好^{こう}む^む。名^なを^を要^{よう}す^す。と^とも。
同^{どう}く^く。わ^わり^りて^て。其^{その}病^{びやう}根^{こん}。又^{また}異^いや^やる^る。と^とも。大^{たい}抵^{てい}洛^{らく}陽^{やう}の^の儒^{にゆ}。驕^{きやう}情^{じやう}の^の弊^{へい}。
わ^わ。東^{とう}於^おの^の儒^{にゆ}。剽^{てう}狂^{きやう}の^の弊^{へい}。わ^わ。洛^{らく}陽^{やう}の^の風^{ふう}氣^き。抑^{おさ}ぐ^ぐ。去^き。地^ち狹^{せう}。
よ^よの^のあ^あく^く。近^{きん}き^き。皆^{みな}そ^そ。其^{その}去^きの^の宿^{しゆく}儒^{にゆ}。よ^よく^く。温^{おん}厚^{こう}柔^{じゆう}謹^{きん}。わ^わり^りて^て。

報雅と云くは、父くうひらく多し、其翁ひり、史記蘇秦
の傳とあるを、秦、我をして洛陽負郭の田三頃わらう、ハ

豈能佩六國相印乎（わよくは、くわくのかくごうをいふ）と云ふも、實もあると云ふは、今
洛陽の儒、大く土著（とぢや）に安（やす）して、隱居（いんきよ）放言（はうげん）自（みづか）らなむ、
く其令（せい）て世勢（せいせい）はわける、一官（くわん）とけり、一職（しやく）と辨（はん）せり
は、去（い）りて其修（しゆ）たるんや否（いな）や、如（ごと）くハ洛陽二頃（らうやうにきん）の田（た）崇（たか）
と云ふは、懷居（わいきよ）求安（きゆうあん）の、くひも、や、く、の、ま、を、お、と、ら、ま、く
是等の人と聖賢の志と論とを、ま、東郭の儒、又、是、も、異、や、り、
周車（しゆしや）の風氣（ふうき）、為（な）り、大、地、潤（じゆん）、く、ま、ま、く、去、り、佐、吏、其、地、も、遍、居、く、其
風、の、ほ、く、く、傳、者、や、く、稱、也、凡、昔、ハ、文、飾、や、く、質、直、り、
わ、り、て、去、り、く、の、人、く、竹、實、を、棄、り、て、麩、惡、と、や、り、
よ、放、蕩、極、爲、德、義、と、銷、刻、し、浮、辭、恠、教、文、を、と、造、作、た、と、

蘇秦の洛陽宿執の言ハやるとと世々遊伴するハ縦横

ハ蘇秦の洛陽宿執の言ハやるとと世々遊伴するハ縦横

捍圍傾危の道やるとと世々遊伴するハ縦横

所片剽悍やるとと世々遊伴するハ縦横

書とる。聖賢の徒とて之の横渠先生も是とて學者

の要務と之をハて我々矯悍警惰の一節と擧て是れ

やも情弱やも義よは志やもはゆる御愿の人とて剽悍

やも忠厚のやるとと世々遊伴するハ縦横

矯悍警惰の一節學者は要務やるとと世々遊伴するハ縦横

するく士多る者の頂上此鉄針多るく

忠厚のやると

これ六第一忠厚此をいふとて下とて人の心あり情弱やるとハ
材質わるとしてやるとと世々遊伴するハ縦横

すなはち士多る者の頂上此鉄針多るなり。

忠厚のうへ海

これ六十一第一忠厚此なりとて下りてその人となりて
材美わよとてやうふ多るなりとてははなして翁日ある樂
毅の侍をよとておとらる。毅ハ我國の古わら次。學問わ
て返るわらよとてさうのいやも。あつて後世毅の將畧わらと
て下りて。學問わらよとて。樂毅燕に昭王に仕へ上將とて齊
と伐く七十餘城と下せり。非常に大功なり。不幸にして師い
やう凱旋せり。先王昭王薨。惠王齊の及朋と信とて將
と之兵權と奪ひて。毅のち。成の大功とす。て。や。不
意とて。見幾而作不侯終自とて。ち。其後。趙よ。名
時。趙王燕と伐む。と毅謀。て。固辭。て。其謀。於。次。

後漢書

誠は忠臣の法とて、さうぞうさうぞうの惠まはれず、あつちあつちの書とるに忠臣此
 言まことかよまこと藹然あり、あつちあつちの世は空谷の足音とて、あつちあつちの
 名とて、あつちあつちの遺言いざなかたき、あつちあつちの學問まなぶなりして、あつちあつちの
 其言まことの者まことを幸とて、あつちあつちの今其言を解とき、あつちあつちの交絶あつち
 不出あつち悪聲あつちとて、あつちあつちの其人や交通あつちして、あつちあつちの其人の悪事あつち
 といふは、あつちあつちの事や、あつちあつちの其人や、あつちあつちの中人あつちひて、あつちあつちの
 といふは、あつちあつちの其人の罪とて、あつちあつちの交絶あつち後よ、あつちあつちの其人
 の言まこととて、あつちあつちの言まことは、あつちあつちの君臣の忠厚あつちの厚あつちなり
 といふは、あつちあつちの言まことを、あつちあつちの言まこととて、あつちあつちの言まこと

言まこととて、あつちあつちの言まことは、あつちあつちの言まこととて、あつちあつちの言まこと

吾徳の跡はとす。忠良去國不潔其名。とて忠厚なる
 事や。是ハ人長あるもの。君と義絶て其國とさへ。わす
 ち。お君の罪より。よと。お君の。こと。わすれ。る。こと。か
 分のと。潔く。せん。と。す。是ハ。其。わ。す。れ。な。か。ら。ぬ。わ。の。名。は
 よ。し。自。ら。わ。の。わ。す。れ。や。り。て。お。も。と。や。る。も。忠。良
 の。心。も。氣。か。た。く。わ。す。れ。時。を。も。の。老人。わ。す。れ。其。父。を。陽。寺
 左。平。次。と。い。ひ。者。長。湫。の。義。池。田。勝。入。の。も。や。く。戦。功。わ。す。れ。其
 後。天下。泰。平。よ。なる。も。大。坂。城。の。軍。と。す。り。市。仁。政。と。す。候
 の。國。に。行。く。も。た。り。わ。す。れ。戦。功。わ。す。れ。士。と。す。候。こ
 の。よ。わ。す。れ。も。た。り。わ。す。れ。候。と。す。り。よ。大。坂。城。一。生。已。の

長湫の戦功といふ。長湫の戦功といふ。大將の敗亡といふ
 其の属するもの。已の戦功といふ。其の属するもの。

の國に侍りたるものありしに、
手よわひしものありしに、
はたしやうと云ふに、

長湫中々の戦功といふに、
其手よ属したるものありしに、
一かつといふに、
古く忠厚の餘味ありしに、
はたしやうと云ふに、

鬼神の徳

ある日講越く後五六軍跡の
中よ神をまつるものありしに、
神國とくちよきものありしに、

長湫中々の戦功といふに

邪を。杯鬼神のゆき。通に。病も。とら。ゆる。わく。ゆる。と。も。
日。あ。る。是。情。を。盡。め。ら。わ。し。よ。う。と。う。を。ゆ。り。也。中。庸。は。鬼。神。を

為徳といふは、いふを得給へる。朱子教して性情功效といふ
ハ徳字此義と教して、いふは、いふは、其徳ある實といふ。左傳
に神と聰明と並みして、壹やるといふ。是則神の徳なり。
我々の神と心算するものといふは、作も、考も、聰明なりといふ
考は、神と心算するものといふは、其の六と耳とをて、六は
耳のひまを、六は、作、曠、の、聰、といふ。も、さ、り、け、て、わ、り、や、ん、月、と
と、く、記、六、月、の、及、ぬ、や、ら、離、婁、の、明、といふ。も、ん、を、う、て、わ、り、ん
る、わ、り、て、思、慮、す、六、類、格、の、人、といふ。も、や、を、猶、豫、わ、り、ぬ、一、
神と耳月といふは、思慮を、清らに、真実を、感し、真実を、感し、と。
是、ゆ、え、の、や、り、く、こ、は、こ、い、ま、こ、こ、一、ツ、の、徳、を、わ、り、る、神、と、考、へ、し、

支那の思想史

丁言天地の同よまはやく耳を極く目もまき地わつて何ともし
 わる重なるせは右のよに現る。端的たんときは性事。わらゆる物の
 體とわらゆる。支那と盈うみつるをわきまもえよ。形もあ聲も
 やる。六人の見聞よ及ん所して多。兼かねわき六感。感すとい
 直に兼かねやま六感せは感でひ。直に兼かねやま六感。直に兼かねやま六感。直に兼かねやま六感。
 終はつあけけらしやう。よま天地のめ用よわらゆる。中庸よ視みく
 而弗見聽之而弗聞體物而不可遺すとつらとけい。昔西
 行法師伊勢の神祖よ流くよめる神。

やまやうるふ。おほよまをさる。けきく。流て
 わらゆるものおほよまをさる。けきく。流て

こころよらる。流く何なる。や。毛。兼かねの感動よおほく
 て何と神あやしく其に他人の。一筋。流くわらゆる。神も其兼かね

この運ちかきとのもや、さゆく言と出く不若や。六子甲の衣違
ふ況やそのまらまらとのもやや。孔子のまらり。さゆく言と出く家や。

すらくもの匂くくの中まよるやとくくくハわ新と。多とハ風の草
木く移ら。あや。共ひきほ高くとくく移く。経よ。家よ
ア國く移く。ま。國を。さゆく言と出く。是自然の移りて。然れば
初め。さゆく言と出く。さゆく言と出く。君子ハ常ハ肉く。さゆく言と出く
は。多とハ。まらまらとくく。さゆく言と出く。さゆく言と出く。六錦と衣
て。さゆく言と出く。さゆく言と出く。其夫ハ。さゆく言と出く。さゆく言と出く。や
ま。さゆく言と出く。さゆく言と出く。小人ハ内行ハ。さゆく言と出く。さゆく言と出く。不
飾とく。さゆく言と出く。さゆく言と出く。其真ハ。さゆく言と出く。さゆく言と出く。衣
つとわら。さゆく言と出く。さゆく言と出く。枚乘。吳王と諫る書。欲人勿。莫
若。勿言。欲人勿。知莫。若。勿。為。け。語。淡。さ。不。似。味。物。也。名。言。也。

漢書 卷之二十一

四

作くやうきしびり小郷ちひさき信子乗の盟と信せしめて子路
の匹夫の一言を信す。田くはら純六軍の兵とあそびて郭子儀。

戦騎の約とあせり。そこの城うじて隣國たつごのやうな軍實ぐんじつ箱
よ及ぶとあそびし。子路のやうな軍實もあつたやうな聖人
の誠中ら及ぶし。その明白して一毫の疑うたがひなきこと。と
天下の人皆あつた。一多し其言とす。一少し其面とす。其は
ま信まこと服ふくする程ほどのやうなものとす。あまの造作もあつた。其後の感
應こんおんありて。恩威おんい智力の及ぶやうな程とす。そのやうなものと
あつた。その子路と信す。世法よこしまのなかやうな僻書ひがきもあつた。好むと悲事と
と。小共實こどもあつた。そのやうな子路と信す。そのやうなわらうと
思ふものよ。限りなく。其の
妖まじと人よと。其の

後志ごし 卷之二 四

座中ひとと。神ハ聰明正直なるものよく。此後の感應ハよく
 ありきまもゆるく。ゆるく者も妖怪不正なるものも。世は流布し
 ゆるものも。此の理わゆるものも。鬼神ハ天地の功用二氣の
 良能と云ハ勿論正理をわらうものも。人の善性悪性は
 氣質よ。あらくると善悪わらうものも。神も人。世は降くハ正
 きわ。正しくしてさるわ。其子細ハ陰陽五行の氣の四時ハ流行
 す。天地の正理を。不正なるものも。其氣を原ハ游散紛擾
 して。つとた。風寒暑濕とや。おのほり。不正氣もわ
 して。く感す。ゆるく。正しく。正しく。天地の同。一の氣。性
 わらう。ハ。正氣と云。感す。ハ。正氣を。邪氣と云。感

す。邪氣を。但正邪とも。二氣の感應を。正。邪氣
 の感。く。神。わ。正。く。正。正氣の感。ハ。正。

下へ感ずけりて去るくして六云此の同よの氣性佳き
おぼるるハヤリ。心氣とて感ずるハ心氣なり。邪氣とて感

す。六邪氣愈々。但心邪とも二氣の感あるも。七邪氣
の感とくも神よおぼるるや。之の良夫心氣の感ハ小と
精誠ヒレのヒレ不致ヒレよおぼるるハヤリ。たるや。高宗の良朋
と感し。周公の重滕と感し。ゆるや。郷衍キョウエンと感し。霜
と感し。韓愈カンユの悪溪アクセの窮キウと感ず。其幸々異や。是も。四
く精誠の感ありて怪キひく多し。東年トウネン真西山の集シウと感ず
よわるる民家の女子シヨ父の疾ヤクと憂ウレく。夜よ。五ハ云よ。向ムカく。才と
と。代ダイえと。橋ハシあり。よ。其誠感して。や。わ。り。き。ん。一。衆シユウ群グン鵲セツ
よ。心ココロよ。遠屋トウヤ飛トビ噪ノイ。一。仰オウく。真守シンシウと。眠ネムむ。六。大星ダイセイ三サン燐リン煜ユク
と。て。月ツキの。と。欄ラン楹エイの。洞ドウと。照テウる。多タ。羽ウ。聖セイ日ニチよ。父フの。疾ヤク。瘵サイ。多タ。

西山郡守として其の志を以てわたり見聞せしが其國を揚表

して懿孝坊と記して傳く其志をくわく著されんは

等々といふ事ありて其感にあらざる事ありしを以て

表せし及人々の心より大なる邪氣の感のこゝろを以て妖

怪と云ふなりやれどもやは奇力鬼神と聖人の語に於て

道も其理を窮む格物の一隅なりし六諸君れりやれども

左傳に妖と魯の申綿の作して人之所忌其氣燄以取之妖

由人興也といふやれども妖は學の言に於て燄火の持盛りて

進退するといふ人の氣を以てするものなりしを以て

不々世能くわき流し其志のこゝろを以てするものなり

志を以てわき流し其志のこゝろを以てするものなり
よわきと云ふやれども其志のこゝろを以てするものなり

進退するとおまへ人の氣ももつものより。まへ人のこころも
不と世能くもつ流し。この地のこころもつものもつものもつもの

志きこえぬわらへ。思おもひのこころもつものもつものもつもの
よわふともつものもつものもつものもつものもつものもつもの
我事わらへはつものもつものもつものもつものもつものもつもの
生いぬまへつものもつものもつものもつものもつものもつもの
見鄭人の伯有とつものもつものもつものもつものもつものもつもの
の感よ絶くつものもつものもつものもつものもつものもつもの
多し水神の祠わらへ。大湖と渡らへ。そよ水神とのつものもつもの
禱るものもつものもつものもつものもつものもつものもつもの
信く。往事と必賽祀せらへ。わらへ。湖とつものもつものもつもの
はね。溺死とつものもつものもつものもつものもつものもつもの

文部省
一
一

一
一

竹りよけ又い祀と多奉信仰して祭奠して
 助かりるもあや遺恨はもたわは必計祀と林と
 思ひて其意の差ふは林を思ひて
 るは其意の差ふは林を思ひて
 祀とやうと思ふよわ祀と又汝の怒氣の
 もわ祀とあふれそふは必替えや決断
 て敵の心を様よか謝するとしの
 の野語信するもぬるやの事なり神ハ決断
 るの道はわらうもやもどくけ人怒るを
 やうらうの氣能ありてやくもやぬも決
 其氣進退せ

屋をけ林を思ひて多奉信仰して祭奠して
 助かりるもあや遺恨はもたわは必計祀と林と
 思ひて其意の差ふは林を思ひて
 るは其意の差ふは林を思ひて
 祀とやうと思ふよわ祀と又汝の怒氣の
 もわ祀とあふれそふは必替えや決断
 て敵の心を様よか謝するとしの
 の野語信するもぬるやの事なり神ハ決断
 るの道はわらうもやもどくけ人怒るを
 やうらうの氣能ありてやくもやぬも決
 其氣進退せ

女を以て執るとは世に有るまじき武士此の剛にして一筋は正なる
 べし其氣能くしてはたは執りて女をなすべし之はまじき人君子に
 おぼくともをちよと邪に正敵せしむる氣はわたくは氷の月よ
 ひびく忽ち消るるやと西域の妖僧傳教をのり殺すを
 自ら暴死し其三思の妄狄仁傑わたくは瘡を施し之次
 畏怖せしむるをたしむるはまじき世に正人君子をたしむるは
 邪氣也のち威福をりうとて怒りなきあつてのちわたくは世に
 まじき宮殿の淫祠をわたくは浮屠の邪法を信してわたくはとてし
 貨を費やしてはたはハナハと名を正體もなきまじき世にまじき
 るまじき人も秋わか其まじきまじき世にわたくはまじき世にまじき

不思議と見ゆらあもわたくはまじき世にまじき世にまじき世に
 てわたくはまじき世にまじき世にまじき世にまじき世にまじき世に

貨と費やさばるハナリト云々ハ心體もやまらるる事也
るも子らも形や六共言事よ教わるやしくゆく信向するも

不思議と見ゆらおもおもハ心よ感く心體と失ふ
てやわらきらとせわゆるあらあめ律のあめ併そ漫
靈驗わると祈はくしく虚誕なるものと造作て世と誣
民と欺く行ふ人聚るく市やあり錢財積く山とやま共ハ
國家の大賊其事ハ天下の大弊といふべし

飛驒山の天狗

あけらくわらくハ氣鬼神の感應と氣の住まらるるの氣
流るハ新文よわゆるとゆるして鬼神ともやとよき
よのやくゆるあき寂然不動ありて其毛末も氣とまう一鬼
神もつゝひえりあわらきわらや中分ある事ハ心ハ氣あくと

飛驒山天狗

かくて我や多く、謝靈運の詩、達人貴自我と云ひ、
 暗くやわくはも、我といふもの、中く靈運よとき、志ある
 ぞ、かくは天且不違、況於人乎、況於鬼神乎とわらも、人とい
 ふ、及るは、天地鬼神も我より多し、いへるもの、といふは、この代の
 聖人の、我とて、天下の上とて、天下惟我の、我とて、多し、
 我志は違ふ、わが志は、後世の賢人の、我とて、万人
 の、我とて、吾人の中とて、多し、我あり、幸とあり、とて、あま
 きは、我といふもの、わが志とて、一念未生の時、わんざんくそん
 體を、君子みと存養とて、あま、天地も我あり、
 位、萬物も、我あり、育、鬼神も我あり、感、かん

我よりぬる、わが志、即康節の一念起る、いっせんおこる
 も、わが志、我より、わが志

るよんやうに其えはけりて板をひたる程に其板の末天物の鼻
 はまへにふれりてふは汝らに種れをまねてのふかぢや
 とくはてふやゆらとそ板のふひげれを思ふをておつるのわき
 におく天物も及ぬわきそをそくあらし念をむけりて
 鬼神も窺ひえらよらんわきを常人多く人々困思雜互
 常は絶るるやうにわのわの思ふ他為の中をわらねる氣
 くひのま物さうにまく我とつた物自立するのわきをいふ
 まいりの我と失くしやわの心源存養のまをいふ心源
 存養の工夫私欲をて成中とていふ人の私欲をよむるを静
 虚勤直とくいふまを思ふ他為とていふ多静虚の中より道

理のまに真実さかり程に万物の先は定まりて万物の後よ
 墮るるやうに鬼神を制して鬼神を制せらるるを無智

存養の工夫は私欲を去り成中と成りよのん私欲を去る事と静
虚動直とくはゆるりと思ふは作爲とくはゆるり静虚の中より道

理のまゝに真実をかり行へる物の先は定まりて万物の後よ
墮るるもの鬼神を制して鬼神を制せらるる事也無智
す臭して天下の大車やなる事體の體もいふ也其思を
去りて萬化の六柄とせらるる不御の指もいふ也老子の象
帝之先といひ秋氏の唯我獨尊といふもいふ事とくは思は
るるやわらぬ事と彼らへ倫として事物とわらぬ事空寂
と事とすまへん欲と制すやつくや天地とわらぬ事とくは
一心とわらぬ事と万事と宰する事とくは其體のわらぬ事と
其用なりやまはれんとく大車やわらぬ事とくは六柄とすまへん
大はゆるり大はゆるり事やわらぬ事

後漢書卷之二十一 卷之二十一 四

も手紙づく力わらやうは見え依ら。二十一代集とて、あやうあ家の
の集まも。春の巻頭とするとんらふ大のくさ八空のうす氣管のうけ寫

なと。春のうい一書もい一書多のいいどやわも。とて八春の如と
いふに第二候は落らざる也。いふに冬はくけのけしきを見
えぬ。氣欠とてなまきくよよん。八がふとら云々其種とせむ。や
雅うよりきうきうなるいいふとやいんいとやいんいはあわの造
他いがういとらとらいおといはくいたいたい。祖父のえらいる作
共いといやいといまいたい、いおいけい款いといれい久い。祖のいおい、い後いきいといあいも
おい雅いのいまいはいわいのい修行いといあいといらいふい。我い々いとい人いをい以い一念いのいまいは
次いとい。獨い居いの時い暗い處いのい事いはいもい八いがいあいのいきいといまいといついとい。いいといいいとい
年いの内いとい春いのいまいらいはい同い一い。念いのい為いもいといるい。既いといるい。春いのい意いのいういとい
まいわいとい。六い年いの内いとい我いといいいといのいういといらいにい同い一い。六い子い里いのい謬いも

徳意の巻

巻一

甲辰

毫釐の^{たかひ}... 瀛溪先生の

幾ハ善悪ヤ... 善悪の國と云

魚... 一筋、悪...

儒の後行の... 色ハ

て... 勉強...

方此歌... 聖...

は... 我ハ此者とするハ...

神ハ...

度仲...

と...

...

...

...

法多し。幸よお吟して。我の此者とするは。咄なまはわらん。
 袖ひらくの歌

度中ひとや。和歌を好める人あり。今を元方の歌たき
 もに訓あるものよ。人心若懸る幾ありて。き得ききものとハ
 思ひよ。えや。くゆ。淡物語や。始る。歌や。そい。と。ハ。前古今集ハ
 介の集とち。い。其歌。つ。の。ま。も。誠實よ。ゆ。歌。お。の。は。し。ら。た。理。よ
 の。あ。く。して。ん。ま。く。く。や。い。右。の。え。方。此。歌。さ。く。し。終。る。母。之。の。自
 の。ら。よ。も。ある。袖。ひ。ち。く。の。歌。あ。せ。り。も。月。令。よ。孟。春。の。さ。く。せ。り
 東風解凍とある。ハ。か。た。ひ。く。く。も。ま。く。く。及。て。傳。る。其。歌。春。風。の。凍
 と。く。く。我。陽。和。の。さ。く。取。初。の。さ。く。や。く。傳。る。の。此。歌。あ。當。た。よ。や
 う。の。さ。く。ハ。是。程。的。實。よ。ハ。是。之。傳。ら。は。る。と。春。風。の。凍。と。く。と
 い。さ。く。る。と。や。く。ハ。い。さ。く。の。さ。く。ハ。か。た。ひ。く。く。も。ま。く。く。と。あ。く。餘。情。あ。る。よ。き。

續後拾遺 卷二 雜記

一、中、後、春、夏、秋、冬、年、事、神、心、結
 一、中、後、春、夏、秋、冬、年、事、神、心、結
 一、中、後、春、夏、秋、冬、年、事、神、心、結
 一、中、後、春、夏、秋、冬、年、事、神、心、結
 一、中、後、春、夏、秋、冬、年、事、神、心、結
 一、中、後、春、夏、秋、冬、年、事、神、心、結
 一、中、後、春、夏、秋、冬、年、事、神、心、結
 一、中、後、春、夏、秋、冬、年、事、神、心、結
 一、中、後、春、夏、秋、冬、年、事、神、心、結
 一、中、後、春、夏、秋、冬、年、事、神、心、結

撰者よそ人のことふらむ程と文章ハ時々上下すとあまは
 時代の盛衰よほまゝのつゝあるよすや、いゝ思ひ終るといふ翁の

ゆゑの同くとのよわらば、古今集の歌もあつたか、そのをよみ、す
うゝ後の作者の及ぶ處きことあらざらん、次ぎをよみ、あつて

撰者よそ人のとうふらむ、文章ハ時や上下すとあまは、
時代の盛衰よほききくゝあるよ、我、いゝ思ひ、終るといふ、
作らむ、ちのよましく、是、傳る、歌人の偏も大く、さか、
思、さく、左の貫之、歌、けく、思ひ、出、り、る、幸、ゆる、天文の、ある、
と、織田備後も、一族、衣、希と不和、よ、ち、て、争、戦、及、多、と、
備後も、う、家、老、平、手、中、務、や、い、ひ、者、一、族、の、不、和、や、る、敵、國、此、
侮、と、文、る、と、の、ち、の、ま、と、と、和、睦、の、ま、と、謀、り、る、幸、と、よ、り、
衣、希、の、家、を、坂、井、河、尻、と、し、る、老、の、も、と、中、務、よ、る、一、族、の、
は、つ、と、と、と、其、文、の、と、よ、貫、之、の、終、ひ、と、の、歌、と、の、き、つ、け、と、を、
親、族、の、ち、の、ま、ハ、神、ひ、と、結、ひ、や、よ、ま、と、い、の、ま、の、ま、の、不、和、

古今集 卷一 五

て世事よしく^し進ま^く悩急す^れや^りハ大^くの^る学者の常
語^とい^はれ^ば翁^とい^はれ^ばも^もや^りま^るや^りく^はく^も。畢^す

竟^ま己^の志^の多^くぬ^れや^りゆ^きと^ハ意^得と^して^世の^ま
外^とあ^らず^るや^り。但^し世^のま^はる^るに^ハ進^まく^る書^とい^はれ^ばも^も
い^はれ^ばも^もハ一^読わ^るる^るや^り。ハ^ハ聖^賢此^れ
道^とは^もわ^るる^るの^はと^もわ^るる^る。致^知わ^るる^る力^行
あ^らず^ると^も其^理と^も行^はれ^ばも^も。其^理と^も書^ハ限^り
死^しと^も。聖^賢の^書と^も第^一と^もす^る程^の学^とハ^ハ致^知と^もい^はれ^ばも^も。
致^知と^もハ^ハ讀^書と^も主^とと^もい^はれ^ばも^も。自^修も^も学^はま^るき^こ
と^も学^はま^るき^こ自^修と^も對^しぬ^れハ^ハの^学と^もい^はれ^ばも^も。致^知の^ま
た^も子^夏も^も仕^而優^則學^とと^もい^はれ^ばも^も。仕^るも^も学^はま^るき^こハ^ハ仕^るも^も。
る^ると^もい^はれ^ばも^も。ハ^ハの^学と^もい^はれ^ばも^も。讀^書ハ^ハ勤^まる^る。

後漢書
卷之十一

五十一

又子路何必讀書然後為學之語ニシテ孔子の語に孔門の學

と云ふハ讀書と云ふとすルやク也ト云ハ傳ハるル也ト云ハ學ハ讀書

に限るレ云ハ云ハ書ト云ハ云ハ義理を傳ハすル事ト云ハ云ハ事ト云ハ而テ其理

と窮スるレ同シく致知の事ありて力行の始なりトもヤ云ハ云ハ聖

人の道也ト日用事物と云ハ云ハせハ父母と云はレ君臣と云はレ夫婦

と朋友と交ハるレ也ト其外世ノ間ノ事ト云ハ云ハ應接はレ事ト云ハ

て一事一物ノ心ニきテ致知の地ト云ハ云ハ一動一靜ノ心ニきテ力行

の内ノ間ノ事ト云ハ云ハ善ヲ行フと云はレ善ト云ハ云ハ惡ヲ行フと云はレ惡ト云ハ

云ハ云ハ皆ハ心ノ中ノ事ト云ハ云ハ心ノ中ノ事ト云ハ云ハ心ノ中ノ事ト云ハ云ハ心ノ中ノ事ト云ハ

事ト云ハ云ハ心ノ中ノ事ト云ハ云ハ心ノ中ノ事ト云ハ云ハ心ノ中ノ事ト云ハ云ハ心ノ中ノ事ト云ハ

云ハ云ハ心ノ中ノ事ト云ハ云ハ心ノ中ノ事ト云ハ云ハ心ノ中ノ事ト云ハ云ハ心ノ中ノ事ト云ハ

ことえめわはせむる若愚とも。皆わの孝悌の心の中へ入るるや。いづれ世
事はさうらきと悔むといふや。わらふまに翁が智よわましく村大坂

あるひともとの後生お地よ寓居するおま。翁は相見しるまき
より紹介しつゝいひくはれ。他日翁の故廬と回く。談論時
と移しつゝ翁ち。幾ら海に世事多くして久き廢学がん
まげれといひ。其人孝から世々のかわる物もといひ。ふ
翁とゆく。其失言と謝しき。翁のそへ。讀書と廢するのやる
とゆや。廢学やといひ。ら。久き故き。咎めき。わら。ふ。と。八。天下
のる。よ。即て其理をまはやく。吾人此知を致す。内外と合
す。の。道。や。い。ふ。一。ま。の。る。陽明良知の学とする。朱子格
物の説を識く。朱子此格地よき。る。あ。も。せ。よ。世の居官。暫職
日長。給仕する人。や。ま。八。何の。い。と。使。わ。あ。く。天下の理をま。と

朱子格地
卷之二

こと御ありしきくゆる。是朱子格物の位をわしくさ
 ぬく。是一間^二とゆる。事物の理と窮む。後よ其のする
 せありるよ。おれん朱子格物といふは、ふまおれん。教
 事の上よ。とゆる。即ち孝の理とまへ。君よ事の上よ。
 共事くよ。即て忠の理とまへ。昨日のいふに、
 今、事のいふは、はくさる。格物致知の学
 也。居官任職のときも、必其るを、
 處一 事空を察し。日くは職する。熱一 誠實くもくす。
 是も格物致知の事と。居官任職の窮理のいふは、
 いく。嚮^{ナキ}よ翁の世の教を、
 處一 事空を察し。日くは職する。熱一 誠實くもくす。

事よ大小わよく。是も大小なけは、
 おれん。はくさる。格物の地。

是も格物致知なりとて居官任職と六窮理のいふは区と
いづくたゞ嚮たゞは翁と世のなるを度するといふは同一なる也と云ふは

事よ大小わよくはよ大小はけよハ何とせしむとやかく格物の地よ
おぼさるはわのり也。さるまきさるひすまきよおぼひのちて天下の物
よ即ち其理よまひひとへしおすり。さるまき先見後後急の序ハあ
るまきさるまき也。日用親切のるまきとて一草一木の理よまき也。
といふはわを今良知の係を疑くはしきやとまきやとまきよあ
ゆまき也。聖人の道とて中をわを疑と。あよそ天下の道とてまき
まきよまきとてハさ。請ふは疑とや。天生而民有物有則物と
てまき也。則ち法やのるまきとハ六藝とてあふとて。其まきとて
よも其法よあらはして。吾んは知なく其理よまきとて人とてたてたふ
として其道をほくまき也。聖人の道とてのり。吾んは不

致知格物論
卷之二

ゆゑ彼はゆゑをえんを勝て敬勝てをえりたるはふく
修をくわりする仁と云く答は修も是と同し。顔子も克己復礼

と告げし。克己復禮必日用事物に即く其礼を驗する
事たるは視聽言動もその修に仲弓も敬恕を告げし。の
敬恕も亦日用事物の上を驗するは出入使民としての修
に其外も推く事也。六經の教も良知をすい事あり
の修。詩思無邪なくす。毋不敬なくす。易ハ審爻識
時をす。春秋ハ尊周 抑夷なくす。礼ハ節制をす。詩
は國風推頌の情とし。礼ハ節禮曲礼の目とつら。易ハ陰
陽卦爻の爻とつら。春秋ハ朝聘會盟の事と備ふ。礼ハ
の取。六經の教を天下にわたるゆゑ。礼の節と明をす。礼の
節の取。つら。事は多し。吾人礼を知りて。礼の節を。公

易の修をす。卷之二

の如くききばるる事なきは是とてくみと換する。節文慎ま
さる事よし。然るに程朱の二の致知力行。則孔門の博文約
禮より程よりして何れも是の致知格物の位と義外とを識り
公事罪と程朱と得るのとはわれは。實に孔門の教より遠かる也。

釈寂室の秘訣

ある日清くく。翁より語り。昔足利家治世の季は。寂室と
いひしは傍わらわ。幾し後大明は渡海し。東帰の後傍侶
に依りて。其位より清くし。吾の緊要の一訣也。秘察此
るが事ともは。毎日は毎日。晨は毎く。まのちとて。頭顧
し。又目とて。如家と顧く。心は念。口は。吾の心と釈

迦文佛の法孫なる事多し。今と預す。比丘の模範と共
く。や。是の事一の免格なる事。寂室異端の位なり。つや

るが事ともぬは付はし。汝毎日晨よ鳥くまの事と行く頭顧
と摩又目ととく如家と顧く心よ念一ロよの事吾ハ也を祝

迦文佛の法孫なるもよ今と殞すも比丘の模範と失
るや。そす一の覚悟なるも。寂室異端の徒なり。つや
殊勝するも。儒家よよ道徳の志操ある人ときらぬ大方儒
者の模範と失く。及く叔氏よ阿同。彼ら下風よ立ると云ふは
ひ。尹和靖の踐履の嚴教するも。俗も身く感く。儒家よ
よ周孔もそよ過しや。以朱文公は高風と圓悟作慕く。其
梅花の詩を和ま。獨憐萬木飄零後。屹立風霜慘淡中。や
ひの二賢ハ真儒なり。異端と絶ま。かよ。彼ら人帰向せ
そ。今世の儒者さるも。其人俗吏中。貶議せらるるも。ハ
て人の敬信を得るも。其まよ。あハ戈を倚りて聖言と駁

数巻附録 卷之二 五十六

俗朱と識る者も近來世は多くが朱傳の儒教に振おこらるるあり
 理やいふ又與朱武士の凡の裏辭うらひもするも人々多くは武道ぶどうの意い
 意いを所致ところなくいお地ちは神とらるるの如く朱武士おしる子
 家いえ又訓しんに汝等すくは友刀ともを佩ひく武士と名宗なむねゆる上八船
 夕武名ゆふぶなをけきしやをさしあしあしに傳つたわり汝等門
 外そとより事お所ところ家いえの國くにを躍なく時とき必氣かなめとほききゆる
 多おほく家いえはゆとせえ悟さときくしけえ悟さとわく八は外そときくあむれ
 あとおれん時とき心こころおききくまんまんとせしひし寂さむ室むろのし家いえと道みち
 多おほくも其その意い趣しゆは同おなじくありさきさき八はの道の道みち中なか心こころ難たがぬ
 きくわのやんわんわんとれ但たゞ其その心こころ急いそぐ志こころあしきすむかふあり

そやうして新氏しんしハ公こう武ぶと破やぶらば次つぎ聲こゑ利りよをわらふとていふ武ぶ士しハ
 武道ぶどうは不ふ定ぢやうとらるるとしりあむおれんそきさ八は管くわん均ぐんおくまつる

一、大なる術業の師やまは。君父の恩は並みけり。稀^{まじ}なり。多^{おほ}く後世の教と多^{おほ}きく。我人依頼^{たの}す。其恩深^{あま}かる。聖人^{せいじん}の
 下^{した}。夫報本不忘^{むねをわすれず}恩^{おん}ハ人^{ひと}道^{みち}此大^{この}端^{たん}やま。されば父母^{ふぼ}の老^{おい}休^{やす}に
 たり。我^{われ}とま^まして我^{われ}と育^{そだ}ま^ます。一毛^{いちもう}一^{いち}髪^{かみ}あ^あくも。父母^{ふぼ}の遺^い體^{たい}ありて
 遺^いを^をの^のお^おる^る也^や。お^おれ^れさ^さる^るハ^ハば^ばじ^じ。と^とま^まく^く忘^{わす}れ^れま^まさ^さす^す。君^{きみ}恩^{おん}は
 浴^{よく}して。不^ず餓^が不^ず寒^{かん}。妻^{つま}子^こと^と出^で産^うみ。親^{まへ}族^{ぞく}と^と賑^{にぎ}む^む。凡^{たゞ}す^すく^く養^{やしな}生^{せい}送^{そう}
 死^しの^の送^{おく}世^よ法^{ぽう}は^は子^こ慈^{あは}一^{いつ}に^にま^まく^くも。君^{きみ}恩^{おん}は^はわ^わら^らさ^さる^る也^や。わ^わら^らさ^さる^るハ^ハば^ばじ^じ
 く^く忘^{わす}れ^れり^り。ま^まさ^さし^し他^た飽^あま^まく^く食^くふ^ふ。煖^{あたた}ま^ま衣^いも^も。君^{きみ}父^{ちち}は^はけ^けふ^ふま^まある^る也^や。
 也^や。以^も禽^{いん}獸^{じゆう}に^に近^{ちか}づく^く也^や。幸^{さいひ}は^は聖^{せい}人^{じん}の^の教^{きょう}よ^よま^ます^す。義^ぎ理^りの^のわ^わら^らさ^さる^る也^や。
 も^もま^ま。禽^{いん}獸^{じゆう}に^に免^{まぬ}ら^らず^ずハ^ハ。あ^あま^ま。聖^{せい}人^{じん}の^の大^{だい}恩^{おん}は^はわ^わら^らさ^さる^る也^や。わ^わら^らさ^さる^るハ^ハば^ばじ^じ

其^{その}心^{こころ}を^を忘^{わす}れ^れず^ずハ^ハ。天^{てん}地^ちの^のけ^けり^り。い^いふ^ふも^も。
 ま^ま。心^{こころ}を^を忘^{わす}れ^れず^ずハ^ハ。衆^{しゆ}善^{ぜん}の^のわ^わら^らさ^さる^る也^や。

ちよひ禽獸に近之也。幸は聖人の教よまて。義理のわらふこと
もまじ。禽獸に免るるは。まじ。聖人の大恩よわらふや。いにて忘る

ま。ちよひ人として常よけこを忘す。天理のけり。いふ。いひ
ま。ちよひ。中心よ失くす。まじ。下。衆善のわらふ。まじ。いふ。
翁ハ常よけこを忘す。いひ。いひ。いひ。いひ。いひ。いひ。いひ。いひ。
家学の要訣も。いひ。いひ。いひ。いひ。いひ。いひ。いひ。いひ。
才の樂よ。いひ。いひ。いひ。いひ。いひ。いひ。いひ。いひ。
言行よ。慎く。いひ。いひ。いひ。いひ。いひ。いひ。いひ。いひ。
聖人の恩。いひ。いひ。いひ。いひ。いひ。いひ。いひ。いひ。
務く。篤實なる方ハ。いひ。いひ。いひ。いひ。いひ。いひ。いひ。いひ。
訣を授く。内省せ。いひ。いひ。いひ。いひ。いひ。いひ。いひ。いひ。
む。此。媒とも。いひ。いひ。いひ。いひ。いひ。いひ。いひ。いひ。

海身新編 卷之二

牛親切しやうしんせつの訓おしなと聞きくハ嘲笑あざわらひく頭痛こづうすやくやくのわちわち悪心あくしんと

ややののわわとと人ひとのの活かつとと今いまのの況きわととままハハささりり我われ嘔おう

吐ともも之これ奴やつ一ひととと世よはは篤とく学がくのの人ひとハハ我われハハ老らう菴そうのの瞽こ言ごんよよわ

腹はらささりり事こと成なりとと難なんんんハハ一ひととと世よはは篤とく学がくのの人ひとハハ我われハハ老らう菴そうのの瞽こ言ごんよよわ

言ことばハハ我われハハ老らう菴そうのの瞽こ言ごんよよわ

言ことばハハ我われハハ老らう菴そうのの瞽こ言ごんよよわ

言ことばハハ我われハハ老らう菴そうのの瞽こ言ごんよよわ

言ことばハハ我われハハ老らう菴そうのの瞽こ言ごんよよわ

言ことばハハ我われハハ老らう菴そうのの瞽こ言ごんよよわ

讀其雜話卷一畢

駿其雜話卷一畢

草行集字句選

森川竹憲先生臨書

全二冊

此書ハ古人佳作ノ片言隻語對句等ヲ撰ビテ書入ルニ晉漢以來諸名家
筆スル所ノ字ヲ集メ各澤文ヲ施シ二字ヨリ起テ四字ニ至ル其用扁額對聯畫
題橫幅屏障及ヒ二行書ヲ成ス簡便比類トシ或ハ其語ヲ印章ニ撰
用スルモ亦佳ナリ凡テ月簷花筵風窻茶席ヲ論セス文人書家平常座右ニ
攜フニ實ニ雅興三昧ノ鴻寶タリ

題畫詩刪

同著

全二冊

此書ハ山水草木鳥獸花魚ノ中ニ合衆人物林岫ノ中ニ見
去人ノ畫題小シク人多キ故ニ佳句ヲ撰ニ品類を分テ板多揮筆
實ニ雅興ノ法ニ至リ推展ノ後射ノ懐宝トシテ

浪華書肆

心所傳通北久太良明

河内屋喜兵衛

